

私の育ての親「分析化学」

酒 井 忠 雄



教育現場から創設もない私立歯科大学の助手に採用され、教育研究生生活のスタートをきって2年目に、単著で初めて投稿した「ベルベリンの溶媒抽出による比色定量法」の論文が「分析化学」誌に掲載された。見よう見まねで書いた原稿は恩師に査読していただいたが、論文としての体裁を整えるのに多くの指導を受けた。「ノート」への投稿であったが、投稿して1か月ほどで審査意見を受け取った。今でも手元に審査意見と回答書のコピーを保管している。当時は審査員AとBの意見書が送られてきて、「タイトルが不適當」、「真のモル吸光係数と見かけのモル吸光係数が混同」、「試薬空試験液の測定値への影響」を指摘されたが、これらの指摘は私の理解不足を補ってくれるものであり、また本文中への書き込みは学術用語の適切な使い方・学術表現など、いろいろと役立つものであった。初めて学会発表するときと同じ心境でおそろおそろの投稿であったが、修正・加筆の結果、掲載可の通知をもらい、小躍りするほどの喜びであった。論文を執筆する経験が全くなかった私にとっては大変な感激で、小さな初期の目標を達成でき、身内にさえも別刷りを送った思い出がある。

次の目標は「フルペーパーを」と決め、自分の研究目的を明確に反映できるよう努め、新たな論文を投稿した。審査員A、Bで13項目にわたる意見があったが、無事「報文」として掲載された。審査員のコメント、審査意見は私の研究をサポートするものであり、回答書の作成は自身の研究を主張する上でも貴重なものであった。また日本語での「やりとり」であるため、解釈上の誤解も少なく、適切な示唆のお陰で学術的な不足、補填しなければならない事柄を把握することができた。「分析化学」誌に掲載された論文が *Analytical Chemistry* の Review に「*Bunseki Kagaku*」として引用・紹介されている記事を見つけて、大変喜んだ。また、日本語の論文にもかかわらず外国からの別刷り請求もあり、勇気づけられた。2002年から「分析化学」誌には「若手研究者の初論文特集」が創設されているが、質・量とも大変洗練された論文が投稿されているのを拝見し、学生を含む若手研究者の質の高さに敬服しながら、初めて論文を書いた当手を重ね合わせて読ませていただいている。

最近、邦文論文を低く評価し、英語論文は高く評価する流れになっており、impact factor や citation で論文の価値が評価される傾向がある。もちろんこの流れに逆らうつもりはなく、いくつかの国際誌にも投稿している。そのような環境ではあるが、「分析化学」誌は厳しくも丁寧な審査、示唆に富んだコメントなどのお陰で、56年もの間学術的に高い質・格調が保たれていると感じている。昨年より「分析化学」の編集の仕事に携わっているが、「論文賞」などに見られるように質の高い論文も多く投稿されており、学術誌としてその使命と機能を十分に果たし、また新たな研究者を育てる役目も担っているように感じている。もちろん先端研究のイニシアティブをとり、世界をリードする研究を国際誌に発表することはもっとも大切なことであることを認識した上で、私を育ててくれた「分析化学」誌の質の向上と発展に尽力していきたいと考えている。

〔Tadao SAKAI, 愛知工業大学工学部、「分析化学」編集委員長〕